

# 震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第97号

平成23年2月10日発行  
和歌山県伊都郡高野町高野山306  
（財）高野山文化財保存会  
高野山霊宝館  
電話0736-56-2029



「宝の蔵 心の色」(霊宝館小宝蔵)

## 利用案内

### 開館時間

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

休館日 年末年始のみ

■拝観料

大人

600円

高・大学生

350円

小・中学生

250円

■専用駐車場あり

高野山霊宝館は  
5月15日(日)に  
開館90周年を  
迎えます

## 第97号 目次

展示のお知らせ・宝物貸出情報

2

収蔵品の紹介71

3

第五回もみじ祭フォトコンテスト  
入選作品発表

4～7

新連載 高野山の古建築 第一回

8

神は細部に宿る 第四章

9

高野山の結界と女人禁制などの  
タブー(三)

10～13

よもやま話 vol.23

14

イベント開催報告ほか

15

霊宝館の庭園

16

### 冬期平常展を開催中

〈主な展示品〉

重文 西南院文書巻第十

(寛治二年白河上皇高野御幸記)

西南院

重文 町石建立供養願文

金剛峯寺

重文 文鏡秘府論

三宝院

重文 即身成仏品

金剛峯寺

具指定 釈迦三尊像

西南院

具指定 騎獅文殊菩薩像

桜池院

御手印縁起

金剛峯寺

高野建立壇場結果啓白文

高室院

高野山絵図(正保三年)

金剛峯寺

長尾景虎像(上杉謙信)

清浄心院

武田勝頼妻子像

持明院

武田信玄寄進状

成慶院

武田信玄禁制書

持明院

銅梵釈四天王五鈷鈴

竜光院

兜率浄土曼荼羅圖

円通寺

山越阿弥陀如来像

西禅院

楊柳観音菩薩像

大明王院

不動明王三童子像

金剛峯寺



長尾景虎像(上杉謙信) 清浄心院

高野山が開かれてからまもなく二百年。この間には、隆盛期や衰退期といった多くの歴史が積み重なって、現在の高野山があります。高野山霊宝館では、冬期平常展として、高野山の歴史と美術の一端に焦点をあてて、「高野山を開く」「高野山の復興」「弘法大師の書」「弘法大師の教学」「武士と宿坊制度」「密教の法具」といったテーマごとに分かりやすく紹介しています。高野山の宝物は、数え切れない人々によって護られてきました。これらの宝物の中から複製本を交えて展示し、弘法大師空海が高野山を開かれた目的と、その歴史の変遷を見ようとするものです。

このほか、浄土教絵画や、如来・菩薩・明王・天部などの諸尊像も展示中です。

### 今後の展示予定

開館90周年記念企画展

「宝を護れ!」大正時代の保存プロジェクト

四月二十九日(金祝) ~ 七月十日(日)

大正十年(一九二二)に創立された高野山霊宝館は、平成二十三年(二〇二一)五月十五日(日)をもって開館九十周年の節目を迎えます。これだけ長い歴史をもつ展示施設は数少なく、日本最古の木造博物館建築である本館は、平成十年(一九九八)に登録有形文化財になりました。

本企画展では、こうした霊宝館の歴史と沿革、建築について紹介します。また、開館当時の展示品を出陳、国宝「阿弥陀聖衆来迎図」を期間限定で公開します。

(詳細は次号にて)



浅井長政夫人像 持明院 (「江〜姫たちの戦国〜」展貸出)

### 宝物貸出情報

生誕百年特別展 白洲正子

「神と仏、自然への祈り」

愛媛県美術館

開催中〜三月六日(日)

世田谷美術館

三月十九日(土)〜五月八日(日)

重文 狛犬 丹生都比売神社

特別展「江〜姫たちの戦国〜」

福井県立美術館

四月二十二日(金) ~ 五月二十九日(日)

重文 浅井長政像・浅井長政夫人像

持明院

春期企画展

「空海からのおくりもの」

印刷博物館

四月二十三日(土)〜七月十八日(月)

国宝 紺紙金銀字一切経 金剛峯寺

重文 弘法大師像(板木) ほか多数



## 収蔵品の紹介 71

たけだかつよりさいしぞう  
武田勝頼妻子像

桃山時代 (16世紀)

絹本著色 縦93.8cm 横37.5cm

持明院蔵



武田勝頼(一五四六〜一五八二)

甲斐(現在の山梨県)の戦国武将・武田信玄の四男勝頼とその妻(北条氏政の娘)、勝頼の嫡男で織田信長の養女(姪)を母とする信勝を一幅に描いています。ややこしいですが継母と子、の関係です。この絵は武田晴信(信玄)像、武田信虎(信玄の父)像と共に一つの箱に納められています。

画面中央には鶴が描かれた団扇を持ち、武田家の紋である花菱文を付けた肩衣かたまぬを着た勝頼を、その下に元服前の髪型で、同じく花菱文の肩衣の信勝と、小袖に表衣おもひかみを打ちかけた勝頼夫人が描かれています。

は信玄の後を継ぐも天正三年(一五七五)、長篠の戦いで織田信長・徳川家康連合軍に敗れ、天正十年(一五八二)には織田軍の甲斐侵攻により妻子と共に自害しました。

甲斐国慈眼寺の尊長という僧の書状が持明院文書内にあり(「高野山文書」六巻)、それによると、武田家滅亡を目前にした勝頼が、高野山において追善供養を行うよう遺言し、遺品やお金が慈眼寺を通じて高野山引導院に納められたようです。遺品目録には「信虎公たけひこ并 信玄公寿像」と共に「勝頼公たけのり并 御台所御曹子像」がみられ、本画像がこれにあたります。

引導院について詳しいことはわ

かりません。同文書によると武田信虎が高野山を訪れた際に宿坊としたようですが、少なくとも正保三年(一六四六)以降の絵図に引導院の名はありません。それ以前についてはわかりませんが、文書や武田家関係の遺品が持明院に伝わることから、戦国大名武田家滅亡後、そう隔たらないうちに引導院も合併されるなどして廃絶してしまっただけです。

高野山には成慶院という、武田家の宿坊寺院がもう一つあり、こちらは現存します。高野山内の複数の寺院と師壇契約を結び、菩提寺とした大名家は他に上杉家などがありました。(F)





## 第五回もみじ祭

# フォトコンテスト入選作品発表

(受賞者敬称略)

### グランプリ賞 高田 昌弘

毎年、春・秋には高野山に訪れています。春は桜、秋は紅葉等いつも楽しみにしています。

この日訪れた時は(11月9日)たいへん寒く、手がこごえる様な状況でしたが、紅葉がたいへん美しく、寒さをふっ飛ばす充実した一日でした。

撮影場所：霊宝館

撮影日：平成22年11月9日

平成二十二年十一月に行いました、第五回もみじ祭「フォトコンテスト」の結果をお知らせいたします。今回のテーマは「お気に入りの高野山」とし、お気に入りの理由やエピソードを添えて募集しました。応募数は三十七点にのぼり、どの作品も高野山の魅力をたっぷり伝える力作でした。ご応募いただきました方々には御礼申し上げます。

普段は気付かなかった場所や、なかなか出会えない一瞬をとらえた写真も多く、まだ知らない高野山の魅力があります。応募作品は四月三日(日)まで霊宝館で展示しますので、是非ご覧いただき、皆さまのお気に入りの場所に追加してください。





### 金賞 木下 滋

#### 「霧の大門」

高野山の入口・大門、地元ということもあり高野山には四季に関わらず来ていますが、ここに立つといつも身が引き締まる思いがします。

特に、夜ともなると日中とは違い、参拝する人や観光客もなく、静かに時間が流れ、いにしえに思いを馳せることができます。

撮影日は、ライトアップの光が霧の中で光芒となり、幻想的な大門を見ることができました。

撮影場所：大門

撮影日：平成22年5月12日

### 銀賞 大石 卓哉

私は、この秋初めて高野山を訪れました。写真は高野山の奥之院参道で撮らせていただきました。今回応募した写真は、奥之院の素晴らしさを語っているような気がします。苔に射す光が、苔の表情を演出しています。私は、「参拝者の願い」そして「奥之院で安らかに眠る方たちの思い」が大樹の苔として生きていと感じました。苔一つずつが、生き生きして安らぎを与えてくれました。高野山で新鮮な気持ちになれた一番お気に入りの場所です。

撮影場所：奥之院参道



### 銀賞 田中 節行

#### 「朝陽の総門」

高野山には格別の想い、世界遺産に登録され風光明媚な景観と遺跡や文化価値の高い建造物に魅せられているリタイヤ組の私です。フルシーズンに参拝に出掛けております。

此所1～2年、雪が降り積もるのを待って、厳冬の世界をも何度か訪れては癒されています。春には桜、新緑の紫陽花の咲くころ、お盆の先祖供養に、そして全山が真っ赤に染まる紅葉の季節には大変印象深く、昨年の紅葉の季節には、濃霧の大門にウツリさせられました。

今年は朝陽が斜めに優しく射し込み、大門を浮かび上げさせる様に、取り巻く紅葉が真赤に黄色に染め、参拝者にも賑わいを演出して頂きました。

撮影場所：大門

撮影日：平成22年11月4日





**銅賞 中本 有香**

9月。縮緬帽子をかぶったお坊さんが町を歩く。  
高野山に修行の為に来山し、毎日御廟へお参り後、時間があればいつもお店に寄って楽しい話をして下さるので、いつもその時間帯になると店の前を通る姿を楽しみに待っていました。  
雨の日。見送る後ろ姿をみて「いいなあ」と携帯で撮影したのですが、急いでカメラを持って追い掛け、気付かれないように車中から撮った一枚です。  
後日、その方に見せると大変喜んでいただき、「まだまだ修行中だからなあ」と笑っていました。

撮影場所：金剛峯寺裏



**銅賞 丹下 三郎**

春さくら 夏は新緑 秋もみじ 冬は冠雪 うるわしの庭  
撮影場所は金剛峯寺の石庭です。勤務の関係で、この庭は日々目にする所で、四季折々の美しい風情が私の心を癒してくれる一番のお気に入りの場所です。春には桜が咲き、夏にはすがすがしい新緑に一変します。秋には紅葉に染められた庭もやがて落葉を迎えます。冬には木々の枝に雪の花を結ぶ姿も美しいものです。

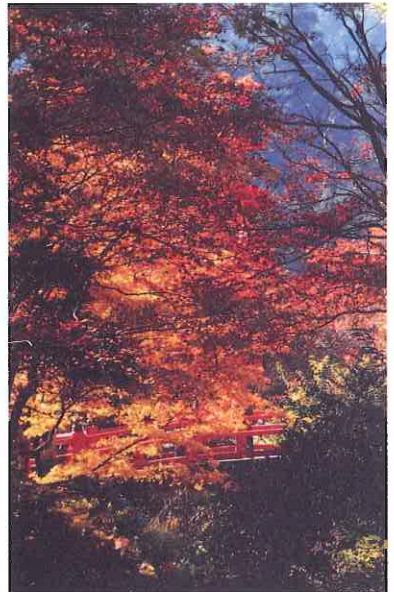
撮影場所：金剛峯寺 石庭



**銅賞 江村 徳晃**  
「紅葉と笑顔」

11月7日、妻と娘が大好きな高野山に行くことになりました。今年5回目のお参りで、小学4年生の娘は奥之院の灯籠堂と、以前受けたことのある大師教会での授戒を楽しみにしていました。当日、夜も明けない早朝に自宅を出発し、6時過ぎには中の橋の駐車場に着きました。先に奥之院のお参りを済ませ、大師教会に向かいました。街一面が見事な紅葉でした。授戒を終え、ふと池に目をやると鮮やかな紅葉が目飛び込んできました。娘がよるこんで、落ちてくる葉を拾おうと手を上げたところの一枚です。

撮影場所：高野山大師教会



**銅賞 坂口 肇**

奥之院にある平和橋を少し離れて川下のほうから、11月6日午前11時すぎに中望レンズで写しました。太陽の光をいっぱい浴びて橋の朱色に負けじと鮮やかに色づいている紅葉風景に感動しました。亡き父の眠る菩提寺がある高野山。四季を通してすばらしい風景を提供してくれる高野山。私の心の聖地でもあり、月参りにカメラ持参で訪れています。

撮影場所：奥之院 平和橋付近  
撮影日：平成22年11月6日



**銅賞 岡庭 亜紀子**

初めて高野山を訪れた2年前に、蓮池にかかる橋のほとりで撮ったものです。ちょうどこの付近を歩いていた時、橋を渡った先にある善女龍王の社の前で手を合わせる修行僧の方が目にはいり、足をとめたような感じがします。朱色の橋と、青々した緑に抱かれたような社と、静止した修行僧の姿に、普段では味わえないような不思議な気持ちになりました。その時に感じた何とも言えない幻想的な感覚が、今でも深く印象に残っています。

撮影場所：伽藍 蓮池





### 入賞 石田 隆彦

初めて高野山に参拝したのが、紅葉シーズンの頃で、壮大な寺院と燃えるようなモミジに、時間の経つのも忘れ感動を覚えたものでした。その中でも印象に残ったのが、人間で言えばよちよち歩きの子供の木でした。立ち止まってカメラを向けられる事はなく、素通りしてしまいそうなのですが、立派な大人の木に負けまいと必死に背伸びをし、決して引け目をとらない鮮やかな色で、「私、キレイでしょ!」と頑張っていました。

どれだけ成長しているかが楽しみで、毎年足を運びます。

皆さんも、秋の高野山に行かれる時は、このかわいいモミジの木の鮮やかさを是非ご覧いただきたいです。

撮影場所：根本大塔付近



### 入賞 井戸 陸雄

霊宝館だよりを拝読して、もみじ祭フォトコンテストの応募を知り、毎年今年こそは投稿しようと思うばかりで機会に恵まれず、毎年投稿写真を拝見しておりました。今年こそはいいアングルに出会えばと心がけていたところ、塔中の紅葉に出会いカメラに収める事が出来ました。

素晴らしい建造物の壁面を真っ赤に染めている紅葉に、思わずシャッターを切りました。長年念願の投稿が叶い、幸いです。

芭蕉もお堂の中で思わず一句を詠んでいるのでは!

紅葉に頬を染める芭蕉堂

撮影場所：普賢院内 芭蕉堂横



### 霊宝館長賞 加藤 保

当日は絶好の秋日和。初参拝の小生にとって、聖域の荘厳さと、今が盛りの紅葉の素晴らしさに圧倒されそう。正にお大師様にお招きを頂いた好日と感謝の念で一杯。参拝を終えて平和橋付近で、艶やかな紅葉(もみじ)と朱塗りの欄干を入れて夢中で撮影をしていました。丁度そんな時に外国人の夫婦と思われるお二人が、ここ聖地高野山に心の安寧と癒しを求めての参詣であろうか、満足そうに語らいながら歩いてくる姿を目にして、急いでシャッターを切りました。その時の作品です。

素晴らしい紅葉と、一会の機会に感謝します。

撮影場所：奥之院 平和橋付近

撮影日 平成22年11月6日



### 入賞 細井 道子

平成20年11月1日に、大会堂と愛染堂の前で紅葉のボリューム感を出すため、望遠ズームで切り撮りました。歴史を経た重みのある建物の前に燃えるような鮮やかな濃紅色。凜とした空気に包まれてゆったりとした時間が流れてゆきます。

高野山は、忙しい日常から解放される充足感があり、自分自身を見つめ直す機会を持って、心優しい気持ちになれます。掃き清められた境内はとも美しく、これからも四季を通じて撮り続けたいと思います。

撮影場所：伽藍 大会堂付近 撮影日：平成20年11月1日



### 霊宝館長賞 梅山 和子

高野山の秋はいつもすばらしいですが、私の目に焼きつき印象に残る風景は、やはり蛇腹路を通って歩く道がとてもよかったです。

撮影場所：伽藍 蛇腹路



### 入賞 楠本 紘司

私は、祖父と一緒に3回高野山に撮影に行きましたが、秋の短日に木陰が長く、根本大塔が鮮やかに威容を示し、壇上伽藍に荘厳さを感じました。が、「こうやくん」がチョココンと立っているのにも親近感がわきました。

撮影場所：伽藍



新連載

# 高野山の古建築

## 第1回 重要文化財 金剛峯寺大門

(財)和歌山県文化財センター 鳴海 祥博



吽(ウチ) 形像



大門の正面全景



阿(ア) 形像

町石道をたどり、高野山で最初に目にするのが大門です。間口二十一m、高さ二十五mの朱塗りの門は壮大で、高野山の表門に、いかにもふさわしい。門の両脇には仁王像が立ち、修行を妨げる邪悪の入山を拒んでいます。ここが俗界と聖地との境で、江戸時代までは、女性はこちらから山内には入れませんでした。でもこの門には扉はありません。あくまでも聖俗の境界の象徴なのです。

空海が高野山を開創した頃は鳥居であったといわれています。平安時代も末になって門の姿となり、その後、三度焼失して、元禄十年(一六九七)から七年がかりで再建されたのが現在の大門です。

大門の棟札に「正大工」狭間河内、「権大工」長田出羽とあります。狭間河内は高野山麓天野に住み、一方の長田出羽は紀ノ川に近い河根という集落に住む大工でした。

実はこの二人、父祖の代から高野山の「正大工」の地位を巡って争っていました。「正

大工」は金剛峯寺お抱えの建設業界トップの称号です。当時の大工集団にとっては死活を懸けた争いでした。

万治二年(一六五九)その争いは江戸の寺社奉行の裁断を仰ぐこととなり、狭間太郎左衛門(大門棟札の狭間河内の祖父)と長田出羽(大門棟札の長田出羽の祖父)は、はるばる江戸へ下ります。

狭間太郎左衛門は山内の別な紛争に係わったとして投獄され、失意の内に死去、訴訟は十五歳の子供猪之助に引き継がれました。寺社奉行の裁断は、天正の頃から高野山で働いていたことが確かめられたので、狭間を高野山の「正大工」と認めるというものでした。この後幕末に至るまで正大工狭間、次席である権大工長田の序列は代わることもなかったのです。元禄に大門の「正大工」を勤めた狭間河内は、この時の狭間猪之助の子息でした。

大工の狭間・長田の両人



冬の大門

は、大門竣工に際し、寺側に願い書きを出しました。祝儀のことでした。大門の再建工事は、材木代や手間賃の費用がかさみとても難渋していること、起工・地鎮・棟上げと工事の節目に期待していた祝儀はなく、竣工の祝儀が頼みの綱であることが切々と述べられています。祝儀は下されましたが要望した額の十分の一でした。

風雪に耐え我々の前に建っている大門。三百年前、その再建に当たった大工達には悲喜こもごものドラマがあったのです。



「神は細部に宿る」(God is in details) 第四章



広目天像の耳



深沙大將像の耳



矜羯羅童子像の耳

前回は、美術品鑑定の世界での、モレルリ考案の細部比較の方法についてお話ししました。

モレルリ法と呼ばれる作品鑑定法はひろく用いられていきます。日本美術でもモレルリ法を用いて作品研究を行うことがあり、仏像では特に耳の比較を行うということと、快慶独特の耳の形があるということ、(本コラム第二章(第九十五号)でお話ししました。今回は高野山の仏像でモレルリ法の実践です。

対象は、金剛峯寺蔵深沙大將立像です。深沙大將像は、元は高野真別処円通寺にあり、快慶作の四天王立像と一緒に安置されていたといわれています。しかし、長い年月を経る間にいつしか四天王像と深沙大將像は離ればなれになってしまったようです。その間の記録は残っていませんし、四天王像中の広目天像には快慶の銘文があるのに対して、深沙大將像には銘文がありません。このような理由から、快慶の作かどうか、

それぞれ意見が分かれ、現在も謎のままです。

そこで、今回はモレルリ法で深沙大將像の作者の謎に迫ってみましょう。現在、高野山靈宝館には確実な快慶作の像として、広目天像と孔雀明王像が収蔵されています。今回は尊格の近い広目天像と深沙大將像を比べます。同時に運慶作の八大童子像中の矜羯羅童子像も参考にしましょう。

上の写真を見て下さい。どうでしょう？ 三つの耳は似ているでしょうか？ それとも似ていないのでしょうか？ なかなか分りにくいですね。順番に見ていきましょう。

まず、耳の輪郭線です。矢印①の部分に注目して下さい。広目天・深沙大將像とも同じ様な弧を描いてますが、矢印の辺りで少し平たくなっている点が共通しています。一方の矜羯羅童子像は、丸いですね。これは大きな特徴の違いと言えます。

次は矢印②。この線は下から上へ

伸びた一つの線が二股に分かれています。この線の形と角度が広目天・深沙像ともかなり近いことが分かります。矜羯羅童子像のこの部分は全体的に円に近く、やはり違いますね。

次に丸印③の丸く盛り上がった部分。矜羯羅童子像は見えていませんが、広目天・深沙大將像の形はほとんど同じです。

耳たぶの形も、広目天・深沙像は丸みがあつてふくよかで、よく似ています。それに対して矜羯羅童子像の耳たぶはやや細長く、スマートな印象です。

さて、以上の比較から深沙大將像の耳は快慶作広目天像とよく似ていて、運慶作の矜羯羅童子像とは違うことがお分かり頂けたでしょうか？

紙面が尽きましたので、今回はここまで。写真を見て似ているのか、それとも似ていないのか、一度じっくり比べてみて下さい。「神は細部に宿っている」のでしょうか？(T)



## 高野山の文化

## 高野山の結界と女人禁制などのタブー

前奥之院維那 日野西 眞定

## (三) 高野山の結界と女人禁制などのタブー

## (1) 結界のタブー

高野山に金剛峯寺を建設するに当り、弘法大師空海が弘仁七年(八一六)に行った結界は、七里結界を条件とする密教の法によるものであった。これは線で描かれていることも既に記したが、もつとも重要なことは、女人禁制などのタブーを伴わないものであった。これは仏教の発生したインドの民俗信仰をもととして生まれたものだと考えられる。この点から考えて、この強いタブーを伴う結界は、日本独自のものと考えられる。その裏には、日本人の潔癖観が存在していると思われる。

今、文献に認められるタブーの種類及び時代的傾向をみてみる。

先ず、もつとも新しい例であるが、

明治三十九年(一九〇六)六月の、金剛峯寺座主密門宥範が、町家側の代表高野山護持会に示した浄規(タブーをこう記している)の主立った条目を示すと次の四条がある。

第五条 山内に於て鳥獸魚肉等の販売並びに之れが取扱を為さざること

第六条 婦女は努めて店頭に於て業務に關係せしめざる

第八条 遊芸に属する歌舞及三絃・太鼓・鼓は禁止すること

第九条 鶏並に猫を飼養せざる

以上であるが、第六条は、同年に女人禁制は既に破棄されているので、こうした表現になっているが、まだ女人禁制に対する心残りは認められる。第

九条は、動物に対するタブーであるが、

高野山では犬が尊ばれ、弘法大師空海を高野に導いたのは二匹の犬であったと信じられ、山の神の使とされている。そのもつとも古い伝承は、『金剛峯寺建立修行縁起』(康保五年(九六八)撰とされる)で、弘法大師空海が、大和国宇知郡で、「大小二ツノ黒犬」を連れた「南山の犬飼」と自称する狩人

に出会い、その放った二犬によって高野山に導かれたと記されている。日本

の山岳霊場では、比叡山が猿、秩父の三峯神社・伯耆の大山寺が山犬(狼)を山の使としている。もつともよく知られているのが、奈良の鹿であるが、これは興福寺の山の神の使いなのである。

ただし、高野山では、この「大小黒

犬」が、高野山地藏院蔵本の『高野大

師行状図画』以外は、「二匹の白・黒犬」となって広められている。日本では白色の動物を尊ぶ傾向があり、またバランスを重んじることから、そうしたものと考えられる。『紀伊統風土記』(四・一七八頁)には、「白犬」の項があり、奥之院には白犬が飼われ尊重されていたとある。また『同書』(五・三三九頁下)の「御社神犬」の

項では、『南山要集』の「大師二犬ヲ以テ高野山ノ使ト為シ給フヲ、大ハ黒、小ハ白ナリ、或ハ大ハ白、小ハ黒ト謂フコト、先徳ノ記ニ此ノ異リ有リ」とあるのを紹介している。

以下タブーの変遷をたどる。





写真1  
向かって左、荻萱上人所持の「足無の鉦」  
向かって右、石童丸所持の「常行念佛の鉦」と西光寺では伝えている

(平安時代)

①『今昔物語』(巻第十一)に、「今ニ人參ル事絶エズ、女永ク登ラズ」とある。

②『寛治二年(一〇八八)白河上皇高野御幸記』に、上皇の一行は、天野の二ツ鳥居に於て、「土人云ク、此ノ山ニ於テハ群動高聲等有レバ、忽

(鎌倉時代)

然トシテ雷電風雨ス。仍テ之ヲ禁ズルナリ」と注意されている。

③『三僧記類聚』(三・九十九頁)に、「奥ノ院ノ出家、金ヲ打タザル事」に、「顕基中納言、奥ノ院ニ於テ出家ス。其ノ時、御廟堂ノ内ニ金ヲ打

ツ音アリ。其ノ後、奥ノ院ニ於テ出家スル人、皆金ヲ打タズ」とある。これは、顕基中納言が得度する時鐘を打ったところが、御廟の中からそれを注意するために鐘を打つ音がしたので、その後は鐘を打たないことにしたと解釈される。奥之院ではこのタブーは今でも守られている。

④『宝簡集』(四三九号文書、文永八年(一二七二)七月の、「定メ置ク金剛峯寺条々(三十二条)」中に、「管弦・弓・鞠ノ事、右、高祖御記文ヲ案ズルニ、管弦ハ当山ニ応ゼズ。琵琶・箏、制ニ背クニ依リ、之レヲ停止スベシ」とある。

⑤『後宇多院御幸記』(正和二年(一一三三))に、「御幸ノ中間、俄ニ雷電降雨シケル事。近里ノ女性等其ノ数巨多、各々御幸拜見ノ為メ、仮ニ男子ノ姿ヲシ結果ノ地ニ入ラント擬ス」ということが分った。

⑥石童丸の物語を生んだ萱堂聖の元祖法燈国師覚心の『法華年譜』には、覚心は「高野山ニ在テ、一把(二にぎり)の茅ヲ結ンデ(粗末な小屋を建てる)禪定ヲ修ス。暇ナ日、鉦鼓ヲ鳴ラシテ阿弥(陀)ヲ念ズ。(中

略)野山鉦鼓ヲ制スルノ故ニ、寺衆襲イ來テ之ヲ奪ハント欲ス。其ノ鉦鼓空中ニ飛行シテ自然ニ鳴ル。此ニ於テ一衆服膺シテ之ヲ許ス。名ツケテ飛鉦鼓ト曰フ」とある。覚心のバツクには北條政子等の鎌倉幕府の支持が有ったので、高野山の僧も認めざるを得なかったのである。なおこの「飛鉦鼓」は石童丸の絵解きの場には、唱導の品として置かれ、長野市西光寺、橋本市学文路の荻萱堂にはその鉦が並べてある。但し、荻萱堂では「飛鉦鼓」と呼んでいるのに対し、西光寺では「足無の鉦」と云っている(写真1)。西光寺では、その呼び名を変えて自分の立場を強調しているようである。

ところで話を前にもどすが、萱堂での問題は後を引き、応永二十年(二四二二)の契状(『宝簡集』(四四一号文書)には、  
一、高声念仏・金叩・負頭陀、一向ニ停止ス可キ事萱堂ノ外と、室町時代になって、一山の僧から認められている。但し、「萱堂ノ外」は固く禁止されており、ここだけが特例として認められている。そ



のために字も小さく遠慮勝ちに書かれてある。なお「負頭陀」は、高野聖の姿にこれを背負った姿がよく描かれているが、ここではそれも禁止されている。

### (室町時代)

⑧ 永正元年(一五〇四)の『弘法大師御託宣』の中に、

一、奥院ノ道ニテダラニヲ誦セズ、高雑談ヲシ、大咲ニテスル事、我が本意ニ非ズ。

一、太鼓・鼓つづみ・ミつづみヲ本ト為ル乱舞ヲ用テ、制禁破ル事先規ニ非ズ。以後ヲ見ル可シ。取り殺サレ畢ンヌ。音曲ヲスル事我が本意ニ非ズ。

とある。弘法大師空海のいます奥之院に参つて、陀羅尼で仏の名号を唱えたり、また読経をすることなどをせず、大声で雑談をしたり、大笑いをする者が出て来ている。また太鼓や鼓などを打ち、乱舞したりする者には、見せしめに死の罰が与えられているが、全体的に、これまでのタブーを破れば、雷が落ちるといふ恐怖感是一段と薄まっている。

### (江戸時代)

⑧ 金剛峯寺文書に、発行年不記の

「六月」、行人方本山の「興山寺役人」が発行した「覚」がある。

「諸国ヨリ当山ニ参詣ノ女人山廻リノ節、和佐峯并ニ奥院御廟辺エ深ク立入り、冥心恐レ多キニ付、今般衆行相談ノ上、御廟近辺両所へ門相イ建テ、和佐峯ニハ乱杭相イ構エ置キ候間、右界内ニ立チ入ラザル様案内ノ宿ニ申シ付ケラレルベク候(下略)」とある。和佐峯という峯は、江戸時代になり女性の結果の道を巡り、山内を遙拝したことは有名なことで、女人道と呼ばれるようになった。そこで拙著『高野山古絵図集成』の索引を見ると、一九七頁に「ワサガ峯」が千手院に有る。それでこの峯のことかと思われる。千手院で峯から山内を遙拝出来る場としては、「轆轤峠」がある(写真2)。ここは展望がよく女性達が首を長くして山内を遙拝したのでこの名が付いた。それでこの場の正式地名のように思われる。

なお、この時代には、参詣人の山内案内は、宿坊の者が行った。その他に、数珠屋などの店の小使の人達が行った。案内料は不要で、その代わり土産物を買う時にはこの店の物を買うことになっていた。

⑨ その他に金剛峯寺の『日並記』

がある。日記であるが、江戸時代には学侶方が金剛峯寺の全体を管理した。塔頭の中の上通の院から選ばれた「集議衆」十三人が相談して議事を決議した。これを下通から選ばれた「記録者」がいて記録した。享保十年(一七二五)から明治時代初年まで(最後ははっきりしない)続けられたが、高野山史の根本史料である。今その一部を読んでいるので紹介する。

ア 文化二年(一八〇五) 四月五日の記述

集議衆(奥之院の取締役と思われる)は、北谷(奥之院のこと、谷の名ではこう呼ぶ)並びに奥之院の山奉行泰円を呼び出し、石田三成が寄進した高麗版一切経蔵の裏に、参詣した女性が「匿かくレ潜ひそシテ」いることがたびたびである。これは「三十人」(集議衆の下の役名)からの報告である。以後このようなことが無いように取り計るよう申し付けている。

イ 文化二年(一八〇五) 九月九日の記述

「奥之院道筋に女体が徘徊致シ候趣ノ風俗之レ有ニ付」、年預代(集議を取り纏める役、年預が名目はその役であるが、その補佐

役の年預代が実務を行った)は、奥之院山奉行浄円を呼び出し、早々に召捕えるように命じている。

ウ 文化十年(一八一三) 五月五・六日の記述

五日、集議衆は、小田原地区の役人を選び出し、六日から大徳院(聖方本山)の釣鐘を鑄造するたために、西小田原谷の花折院(聖方)の明屋敷を使うので、そこに女性客等がひそかに入り込まないよう、七院谷(高野山全体を七つの谷に分けて取り締まっていた)全部の山男に厳しく「制道(道を取り締まる)」するように申し付けている。翌六日、小田原山役人本龍は年預坊代に対し、昨日云い付けられた通りに七院谷全部の山男を動員し、「婦人共入り込マザル様制道シタ」が、轆轤峠に続く花折院山と天徳院山などの山中を伝い、山内の中心部にある六時の鐘撞堂や大塔の鐘撞堂まで来て、その中にこっそりと入り込んでいる女性が居り、なかなか山男だけでは取り締りにくいので、七口全部の山ノ堂もこれに協力するように仰せ付けてほしいと願い出ている。山ノ堂には半僧半俗の巡査のような役人がいて、通行する参詣

人を取り締まった。特にその人々の通行手形を調べたものと思われる。江戸時代には、幕府は全国に關所を設け、往来する人を管理したからである。この人達は明治時代に入ると、請願巡査となり、金剛峯寺内に住む町民を取り締まった。

以上であるが、結界が女人道となっていた頃には、奥之院と轆轤峠とが女性客の忍び込み易い場となっていたのである。

⑩ 貴紳の女性の入山を許可する。

『日並記』文政二年（一八一九）三月二十・二十一日の記述

文政二年の正御影供に、大覚寺門跡の御代參千嶋儀清が参つて来ている。本来ならば浄菩提院（南谷・学侶・上通）に宿泊するのであるが、この年は同院が修理中であつたので、代りに心南院（南谷・学侶・上通）に泊まった。もともと浄菩提院には、寛永年間（一六二四～四三）に同寺門跡尊性法親王（後水尾天皇の皇弟）が、高野山を好んで住したことがあつた。それ以来、代參者を正御影供

に参らせる習慣が生まれ、これは現在でも生きている。明治時代までは門跡寺院には、このように皇族が住職となっていたのである。

ところが、この年の御代參千嶋儀清は、「御女中方上下七人」を同伴していた。『大覚寺』（同寺刊）の「大覚寺の歴史」によると、その中の一人「御所様」は、光格天皇の皇子韶仁親王の女房千里で、皇子との間に生まれた精宮が、前年同寺門跡の後継ぎとなることを約束された「御附弟」（弟子のこと）となる勅許を得ている。これを記念して同伴を申し出たのだが、集議衆はこれを特別のこととして認め、一泊の許可を出している。ただしそれだけで、翌日は他の女性達と同じく女人道を巡り、山内の見学などは許されていない。私は天徳院の伊藤真城先生が、江戸時代に同院の大檀那前田公の奥方が同院に来て泊まられたことがあると云われた話を思い出す。このことも調べる価値があると考える。



写真2  
高野山絵図 西南院蔵  
轆轤峠に参る女性参詣人。荷物持を従えている。別に、酒宴を行っている男性達もいる。ここでは酒を飲むことも許された。女人堂と思われる建物もある。



## 収蔵庫通信

## 国宝・金銀字一切経の収納整理

紺紙金銀字一切経がいつ高野山にもたらされたのか、明確ではありません。しかし、はるか遠く奥州（岩手県）平泉から運ばれてきたのには間違いないと推定されています。約九百年も前に書写されたものとは思えないほど、金銀泥は今も輝きを失ってはいません。これにはまったく驚くばかりです。

本経は中尊寺経とも呼ばれ、藤原清衡の発願となり、永久五年（一一一七）から八、九年の歳月をかけて書写されたものです。本経の特長は何と言っても、紺紙に金字と銀字に



黒漆塗箱に経巻を納めていた従来の状況  
箱寸法：縦32.5cm 横22.8cm 高11.5cm



新たに制作した経巻を納める全44段のタンス。上部には黒漆塗箱を収蔵。

経巻は黒漆塗箱の中に各十二巻ほどが納められ、一箱の重量は約三・

五kgとなり、その総数は三四六箱と

なっています。こうした収納方法は、

経蔵に納めるにはコンパクトで良い

のですが、当館に収蔵している現状

からすると、管理がしづらいことが

ありました。これを改善するために

は引き出し式タンスを設け、各経巻

を平置きにして、管理と出し入れを

容易にすることが望まれました。そ

の場合、一巻ずつ並べるのに経巻ど

うしの仕切りをどうするかというこ

とが問題となりました。経巻は全長

一六三四・〇cm、最短のもので三

三・七cmとなり、各経巻の太さ（胴

径）に随分と差が生じます。これを

解決したのが、タンスを制作発注し

た地元の建具屋さんの協力でした。



タンス1棹に約750巻の経典が収蔵されています。  
合計5棹を制作しました。

障子の棧の骨組みを組み込むよう

に、経巻の狭間に自在仕切り板を設

けることができました。

今回のタンス収納への変更に伴

い、大正新脩大藏経目録の順番に従

って経巻の並べ替えを行いました。

そして収蔵番号を通番制に変更し、

あらためてその数を調べると、総数

が四三二四巻になることが分かりま

した。国宝指定数は四二九六巻です

ので、未指定が十八巻も多く存在す

ることが明らかとなりました。

次の作業としては、各巻ごとに収

蔵ラベルの付け替えを行い、それで

ようやく完了となります。文化財の

維持管理には、随分と経費と時間が

かかるものだと実感させられます。



各経典を1巻ずつ並べるのに移動型仕切り板を設ける  
ことで解決しました。

(M)

時事

「中国古琴 お話と演奏」  
開催しました

昨年十月から十二月にかけ秋期企画展「海を渡る名宝―アジアの中の高野山」を開催しました。その関連イベントとして、展示期間中の十月十日（日）、日本における数少ない古琴演奏者の一人・橘田勳氏を講師に迎え、レクチャーを交えた古琴の演奏会を行いました。会場となった霊宝館迎賓館には、午前の部・午後の部あわせて六十人ほどの方がお越しくださいました。



橘田勳氏と愛用の琴

古琴は、中国の絃楽器の中で最も古い歴史をもち、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されています。精神



修養の楽器とされ、古くから文人にたしなまれてきました。

左手で絃を押さえ、右手の指の爪で弾きますが、演奏技法は多岐にわたり、その繊細で落ち着いた音色は聴く者を魅了します。

今回は、現在まで伝わる多くの琴曲の中から、趣きの異なる四曲「良宵引」「平沙落雁」「憶故人」「普庵呪」をお楽しみいただきました。最後の「普庵呪」は仏教音楽が元になっていると考えられることから、仏堂さながら、香煙たちのほる中での演奏となりました。

今後こうしたイベントを随時実施していく予定です。

霊宝館本館放光閣の  
内装工事を行いました

本館放光閣の壁紙が経年により劣化し、またカビも生じたため、昨年十一月から十二月にかけ、全面的な貼り替え工事を行いました。

本館は、大正十年（一九二二）開館当時の建物（登録有形文化財）で、木造漆喰塗りです。構造上、空調設備の設置が難しく、標高八百mという厳しい自然環境の中で、温度と湿度の調整が積年の課題です。建物を含めた貴重な文化財を公開しつつ、より良い状態で未来へ伝えていくにはどうすべきか、最善策を探っています。



北野武氏  
テレビ収録のため来館

昨年十一月十六日（火）、北野武氏がテレビ番組収録のため霊宝館を訪れ、観覧風景を撮影しました。  
※番組は一月三日（月）に放映されました。



静慈園館長の説明を受ける北野武氏





霊宝館の庭園

# アセビ・あしび・安之婢・馬酔木

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

アセビは冬枯れの季節に、むしろ緑色を深くする常緑低木です。

高野山では、さほど労することなく自生種の生態の観察、植栽されているものの観賞ができます。

霊宝館の庭園でもいろいろな容態の、この木を観ることが出来ます。霊宝館の近くでは、壇上の囲い木柵ぞいに生け垣として植えられているものは古木が多く、幹にはこの木独特の捩れがあり、荒い外皮は剥げ落ちて灰白色の光沢があり大幹杉を背に濃緑色の葉枝が盛り茂っています。これらのアセビは秋の終わり頃から枝の先々に糸状の柄を伸ばし、沢



冬の蕾



葉盛り 花群れ



萌えでる新葉と残花

山の朱褐色の蕾みをつけはじめます。冬の間に徐徐に膨らみ、春の諸法会が執り行われる頃、法会にともなう妙音や訪れる人達の軽やかな足音、明るい談笑などに覚醒したかのように、蕾みがスズランに似た形の白い花となります。花群れに騒々しさがなく静やかです。

学術を守護する女神の名・Peridanによるといえますから、霊宝館の庭園に相応しい木といえます。

花の盛りが過ぎた頃から枝先に紅黄色、朱褐色の新葉が萌えはじめます。秋には球形の蒴果が熟して割れ、種子を散布します。

現在、アセビが和名となつていますが、古い書物などでは安之婢・安志妣・馬酔・馬酔木などの字で、あしびと読ませています。あしびは「足痺れ」、馬や牛などが、この葉を食べると苦しんでふらふらする様子によるといのが通説。馬酔木の字は現在も慣用されています。

この樹種はツツジ科・アセビ属、学名はPieris japonicaとされています。Pierisはギリシヤ神話の文芸・

この葉にはアセボチン、アセボトキシンなどという有毒成分が含まれ家畜のヒツジが中毒した例もある



古木の幹

そうです。なお、方言名は百五十余あるとい、高野山では、あせんぼと呼んでいます。

この葉の煎液(汁)を牛や馬などの外部寄生虫や蔬菜の害虫駆除に用いたことによる、たでしば・うしあらい・だにしば・はもり、仏前の供花に用いることによる、はなしば、節分に豆を炒るとき焚く柴としたので、ぱりぱりしば、元日の朝、この葉枝を竈で燃やしたことによる、ぜにごめしば、春の彼岸の供花とするので、ひがんのきなどからは、その地方の大部分は過去のものとなった習俗や民俗行事を窺い知ることができます。

はもり、については蔬菜の葉を守る・「葉守り」の他、枝葉が盛り茂る木・「葉盛り」説も。この枝葉はパリパリと火花を散らしてよく燃えることを実験しました。